

福島県立安積高等学校

第132期生入学式 式辞

日 時 平成28年4月8日（金）13：30～

場 所 福島県立安積高等学校第一体育館

式 辞 （例年にない暖かさが桜の開花を促し、）

風が柔らかに薫り、開成山の桜もほぼ満開になるなど、川の流れも、大地も、空も、ここ安積野が生命のエネルギーに充ちあふれようとしております。

本日、県議会議長代理であります県議会議員 椎根健雄 様を始め、多くの御来賓の御臨席を賜り第132期生入学式を挙行できますことは、誠に喜ばしい限りであります。

ただいま、入学を許可しました320名の新入生の皆さん、入学おめでとう。厳しい入学試験を見事に突破し、今は高校生活に対する大きな期待と少しの不安で胸が一杯になっていることでしょう。その喜びの陰にあって、ひたすら皆さんの健やかな成長を願い、ご苦労された保護者の方々、そして、親身になって叱咤激励していただいた小・中学校の先生方など、皆さんを今まで支えてきた方々のことを決して忘れてはなりません。

さて、本校は、明治17(1884)年、22歳の若き森鷗外がドイツ留学へ旅立ったのがこの年であります。本県唯一の旧制中学校として創立されて以来、今年で132年目を迎える、日本でも有数の歴史と伝統を持つ高等学校であります。本校の卒業生は、約3万3,600名を数え、世界平和こそが人類の永遠のテーマであることを生涯訴え続けた国際的な歴史学者朝河貫一博士を始め、全国でも4校だけと聞いていますが、芥川賞作家を3名輩出するなど、様々な分野での活躍は枚挙にいとまがありません。

ここで、「第132期生入学式」という言い方に改めて注目してください。他の高校では「平成28年度入学式」或いは「第何回入学式」とするのが一般的であり、「第何期生入学式」としているのは本校だけであります。創立132年目に入学、同期生と共に、133年、134年と安積の時間を刻んでいく、そのことを強く心にとどめてほしいという多くの先輩たちの熱い思いから、他に例のない言い方になっているのです。

この安積で、時間や言葉・記憶を共にすること、具体的には、授業に集中し、部活動で仲間の大切さを実感し、紫旗祭、紫の旗の祭りと書きますが、その紫旗祭という学校祭でクラスが強い絆で結ばれ、安積という学校文化を3年間共有すること、これが安積で学ぶ最大の意義であり、そして、安積の誇り・プライドであると私は考えています。

さて、他校の校訓に当たる安積の精神は、「開拓者精神」「質実剛健」「文武両道」の三つであります。男女共学となって16年目の今も変わることなく、生徒諸君が歩む道を照らし続けていますが、これは一朝一夕にできたものではなく、100年以上の長い時をかけて揺るぎないものになったものです。それらは、ただ何もせずには得られるものではなく、常に先輩達から学び取るものであり、そうしなければ伝統を受け継ぐことはできません。

歴代の安高生は、明治・大正・昭和、そして平成それぞれの時代背景の下、「真の安高生は如何にあるべきか」「安積らしさとは何か」を絶えず自らに問いかけて検証し、自主自律の精神のもと、新たな伝統を創造してきたのであり、ここに安積の生徒の凄いところを私は感じます。

また、「質実剛健」という言葉は、真面目で飾り気がなく、たくましくしっかりしている安高生、自分の外見や外側を気にすることなく、自分の内側をしっかりと見つめて成長していく安高生にこそ相応しい言葉であります。

さらに、「文武両道」を実践するためには、かなりのエネルギーを必要とします。そして、何と言っても「タイムマネジメントと集中力と継続」が鍵となります。つまり、限

られた時間を上手に管理し、いかに集中して勉学に打ち込み、いかに密度の濃い練習で自らを鍛え続けるか、安積の教師集団は皆さんと常に真剣勝負をしながら、必ずや君たちをリードしてくれるはずであります。学習意欲が高く学習時間が多いのは中学3年生と高校3年生で、極端に下がるのが高校1年生であり、また、その傾向は所謂進学校ほど強いとも言われます。安積に入学したことに満足せず、高校1年でどのくらい齒を食いしばって勉強するか、皆さんの進路実現の鍵は間違いなくここにあります。

新入生の皆さんは、「自主自律」という言葉をこれから繰り返し聞くことになるはずですが、これは周りからの保護、干渉や制約などを受けず、自発的に自分で考えて行動し、規律・ルールに従って己自身を律することであり、それは、教師から言われたことや与えられた課題だけをこなすのではなく、自分の進路目標実現のために何をなすべきかを自ら考えて行動することであり、また、人と会ったら挨拶をすること、家庭学習を毎日すること、人が嫌がることをしないこと、つまり、人間として高校生として、当たり前のことを当たり前にするということでもあります。

保護者の皆様には、お喜びもさぞかしのことと、心からお祝い申し上げます。私ども教職員一同は、新入生を迎える喜びとともに、責任の重さをこの両肩に感じています。これからの3年間、御協力、御支援を賜りますようお願い申し上げます。

御来賓の皆様、本日は年度始めのお忙しい中、御臨席を賜り心より御礼を申し上げます。一昨年本校は、130周年記念式典を始めとする様々な記念事業を進める中で、生徒が充実した学校生活を送ることができるよう、教育環境の整備に努めてきたところでありますが、今後とも安積高校に対し、深い御理解と温い御支援をお願い申し上げます。

終わりに、あの東日本大震災から5年と1か月が過ぎようとしています。大震災の影響は、少しずつ小さくなってきて、復旧が進んだ部分もありますが、本県の大勢の子どもたちが、未だに県内外で避難生活を余儀なくされており、農産物などの風評被害が続くなど、本県は真の復興に動き出しているとは言えない厳しい状況が続いています。大震災以降、「ふくしまの復興に自分の学びを活かしたい。ふくしまのために何かをしたい」このように考える高校生が増えています。

この春初めて実施された東京大学の推薦入試において、本県唯一の合格者は本校の生徒会長も務めた129期生ですが、彼も大震災の課題に建築の観点から取り組みたいと考えています。勿論、世界へ飛躍しようとしている生徒も大勢いますが、その場合でも、「3.11以降のふくしま」を忘れることなく、できれば、最終的にはふるさと福島の地に足をしっかりつけて活躍してほしいと考えています。

第132期生の皆さんは、大震災の発生時は小学校4年生でした。それから2年が経ち、世の中が少し落ち着きを取り戻しながらも、依然として不安な空気が漂う春に中学校に入学して3年間を過ごしました。皆さんはつらい体験を乗り越えてきた、或いはまさに乗り越えようとしています。その体験は非常に貴重なものであり、皆さんが前に進んでいく原動力となるのではないのでしょうか。その得がたい経験を生かして、自分の夢をみつけ、その夢に向かって高い志を掲げてください。そして、その志を持ち続けて、安積の同期生と共に切磋琢磨し、安積の誇りを胸に抱いて、充実した高校生活を送ってください。

第132期生が安積の精神を体現した誇り高き安高生に成長していくことを期待するとともに、3年後の皆さんの輝く瞳と笑顔を思い描いて式辞と致します。

平成28年4月8日

福島県立安積高等学校長 久保田 範夫